

(論文)

# 発展する留学成果意識

## — 日本人成人女性の生活設計と留学

赤崎 美砂

---

### キーワード

生活設計 留学成果 成人 女性 プロセス

---

### 1. はじめに

留学現象は変化が激しい。世界の留学生数は1990年の1.1百万人から、2000年には2.1百万人、2010年には4.1百万人と10年ごとに倍増している (OECD, 2012)。また、留学のあり方にも、知識社会化、グローバル化、発展途上国の先進国化等の地球規模の変化に伴って、留学生の多様化、留学生政策の変化、大学の変化が起こっている。

留学を行う主体としての留学生には、社会階層・年齢・性別・目的の多様化がみられる。エリート層限定であった留学が経済発展とともに大衆化し (小柳, 2002)、知識社会・グローバル経済で生き残る「エンプロイアビリティ」<sup>1</sup>を確保するための生涯にわたるスキルアップ志向が定着し、成人の留学生が増加する<sup>2</sup>。また、本国での女性の就学率向上に伴い女性が盛んに留学するようになる。また、留学の目的についても、個人の労働市場価値の向上 (キャリア継続・変更) に加え、キャリア探し、自分探しといった遊学の側面も報告されている (小柳, *ibid.*)。

各国の留学生政策も変化し続ける。例えば留学生受け入れ数が世界最多のアメリカ合衆国でも入超気味の留学生数<sup>3</sup>のバランスをとって送り出し留学生を増やし、国際競争力の向上を目指す政策が打ち出された。政府が資金を投入し大学がプログラムを作り、学生は留学体験は就活時の履歴書に有利だと考えプログラムに参加している (Mousumi, 2012)。ヨーロッパへの短期留学を中心に<sup>4</sup>、2008年度から翌年度にかけての1年間で26万人から27万人と送り出し留学者数が1万人増加している (Institute of International Education, 2011)。

このような世界的な動きのなかで近年の日本は、留学生の送り出しが低調でピーク時に比べ2.5万人ほど減少している (文部科学省, 2013)<sup>5</sup>。受け入れも「留学生30万人計画」 (文部科学省, 2008) <sup>1</sup>が進んでいるが、英語圏に比べれば数量的に多いわけではなく (OECD, *ibid.*)、また、研究者の流動性、組織やプログラムの柔軟性、国際的ネットワークにおいて先進的とはいえ留学生受け入れ促進策が必要な状態である (金子, 2000)。

送り出し数を増やすためには、海外渡航手段の多くの選択肢のうちのひとつにすぎない留学 (赤崎: 2012, 加藤: 2014) のメリットを説得力をもって説明する必要がある (田中, 2010)。また、

受け入れ数についても、カリキュラムや留学生支援制度を整備した上で効果的に海外に広報してはじめて留学生が日本にやってくるのだろう。そのためには留学生はみな同じという留学生像から脱却し、多様な留学生を想定して彼らの幅広い目的や期待に対応したカリキュラムや留学生支援システムを構築する必要がある。このとき、留学生の留学経験と生活設計との関係を踏まえた上で制度を整備すれば、日本への留学がエンプロイアビリティを強めるイメージを作り出し、留学生にとって日本への留学がより魅力的なものになるだろう。

留学生の実態にかかわる先行研究では、目的・成果・その後のキャリアが一致するものとそうでないものが報告されている。学生支援機構が実施した大規模な留学経験者の追跡調査（2005）では、大学院留学生は明確な目的意識をもって留学し確実に成果を得て、留学経験が現職に反映されている傾向があった。一方、前述のように小柳（2002）は留学の大衆化に伴い留学の動機が多様化し、学問・労働市場での価値向上等への専念ばかりではなく、留学に人間的成長を期待するなど多様な留学目的があることを指摘している。

留学生の多様性には、社会階層・年齢・性別・目的等のカテゴリーの想定が可能であるが、それぞれのカテゴリーに対象を限定した研究は少ない。その中でイギリスの大学院に留学した成人学生（就業経験あり）を対象とした研究では、留学の成果は能力（外国語能力、専門知識、コミュニケーション能力、困難克服・課題遂行力、違いへの感受性、日本社会の相対視）として認識されていた。留学中の学習・生活場面で能力感をもち始め、帰国後の業務での活用や他者からの評価等を通じて能力感が深化する。（赤崎, 2009）

キャリアプランは、職業ビジョン形成 → 目標設定 → 留学（能力育成）→ 就職活動（他者評価）→ 職場（能力活用・他者評価）→ 現実解釈 → ビジョン形成、といった各フェーズを進むように形成される。このプロセスには例外もあり、複数のフェーズが同時進行、フェーズを飛び越える等のパターンもある（赤崎, 2010）。帰国後の職業ビジョンが未定だが育成したい能力は明確で、その能力を育成するために留学する女性もいる。留学経験について内面的な満足を感じている一方、現職への不満足感がキャリアプラン形成を継続するドライブとなり、複線キャリアを選択する場合もある（赤崎, 2009）。

ビジョンや目標設定の曖昧な留学は、イギリスに留学した日本人大学院生（就業経験の有無は不明）を対象としたもうひとつの研究（西尾, 1999）でも指摘されている。男性は明確なキャリア展望をもちキャリアパスの一部を構成するパーツとして留学する傾向がある一方、女性は、留学後どの労働力市場にどのような能力をもった人間として自分を売り出すのか見通しをもたないまま、キャリアアップを目指す以外の、例えば外国生活への憧れを留学の目的とするケースが少なくない。

西尾 (ibid.) はこのようなキャリア見通しの曖昧さは、家庭内の性別役割分担意識に起因するという。強固な性別役割分担意識をもつ家庭の出身者は留学後の自立への関心が低い一方、自立を目指す女性はフルタイムの母親を持っているか専業主婦の母親を反面教師として捉えているかのどちらかである。

- 2 また日本国内の女性に対する労働慣行が長期的なキャリアプランを立てにくくさせているという指摘もある。生涯就業率のM字カーブ（結婚・出産を機に正規職から退職し、子どもの成長後に非正規職として再就職する）は、先進国の中では日本と韓国の2カ国に顕著に現れる現象である（武石：2006, 村松：2000）。本人の選択と外部的制約の両方の要素によってキャリアが形成されるが、女性が男性と異なるのは、職業キャリアと家族キャリアのどちらも考慮する点であり、過去や現在の状況や将来生じうる制約からの影響を受けるためキャリア展望が変わりやすい（村松, ibid.）。西尾 (ibid.) は結婚・出産による中断だけではなく、昇給・昇進の制限や年齢制限等の女性の労働条

件が長期的なキャリアプランを立てにくくさせているという。つまり20代前半の学業終了時に将来生じうる制約を考慮しながらライフプランをするとき、明確かつ単線的なキャリアプランを持つ動機付けが低くなる。したがって経済的自立とキャリア優先のライフプランが彼女たち自身の課題として意識されるのが遅くなり、意識した時点では女性に対して特に強い就職時の年齢制限が、彼らのキャリア選択肢の幅を狭める作用を持ち、女性のキャリア形成は紆余曲折を続けることになるというのだ。

職業と個人生活の双方に目を向けて生活設計しているのは女性に限らず、男性にもそのようなケースがあり、また生活設計は継続的に変化する。変化するのには生活設計だけではなく、留学の成果としての能力の認識・現職への評価もまた職業上の経験に即して変化している（赤崎：2009, 2010）。

成人の留学と女性の留学にかかわる先行研究によって、仕事に活かされる能力として実感される留学の成果、複数のフェイズで構成されるキャリア形成、職業と個人の2つの側面の不可分さ、女性の生活設計（職業+個人）の困難さ、成果・生活設計の変化の継続性、等が確認された。今回の調査では、留学経験のある専門職を志向する成人女性を対象として、留学の成果と生活設計の関係について、分析することを目的とし、多様化する留學生の実態への今後の対応に役立つ情報を提供したい。

## 2. 研究方法

### 2.1. 研究アプローチ

本研究は、留学中と帰国後の生活の経験を個人がどのように認識しているのかということを理解するプロセスであって、多くの個人から集めたデータを数量的に分析し普遍的な法則の発見を目指す調査ではない。このような質的研究では、「人々の生活世界は文化的意味に満たされていると考え」、人が「どのような意味世界に生きているのか」（箕浦, 1999：11）を問うことになるため、解釈的アプローチの1類型であるマイクロエスノグラフィーで研究全体をデザインした。

### 2.2. 研究方法

解釈的研究は調査協力者がもたらす「人と人、人と状況やモノとの相互作用やそこで伝達される意味」を反映した情報を分析するプロセスである（箕浦, 2009：3）。そのような情報を得る方法として半構造化インタビューと人口動態および満足度に関する質問票を用いた。半構造化インタビューは、アンケートのように詳細な多くを質問を立て、全ての調査協力者に全く同じ質問をするというものとは異なる。半構造化インタビューでも設問は設けるが、研究者が予測する枠組みの中だけでデータを収集するのではなく、調査協力者が自分の意味世界を自分の表現方法とペースで話せるよう工夫し、予測したこと以外のデータを集めることも織り込んだ方法である。予め、留学の成果をどのように認識しているか、成果とその形成プロセス、留学の成果と帰国後の生活の設計との関係について話を聴くという、ゆるやかな設問を決めておいてインタビューを実施し、その設問から想起されることがらを調査協力者のペースで話してもらった。

録音されたインタビューを書き起こしたものをデータとし、それを「概念の形に置き換える」（箕浦, 2009：20）ために、データを意味のある単位ごとに区切って、それぞれにコンテキストを含めデータに密着したラベルをつけた（名付けた）。その後、データから距離を置き、概念のみに注目して概念同士を比較し抽象度を上げながらいくつかの概念カテゴリーを作り、さらに中核となる概念を中心に副次的なカテゴリーを関係付けるプロセスをふんで理論的仮説を生成していった。

箕浦（1999）は、データの中に「筋書き」を見出すこと薦めている。今回の調査の分析でも、それぞれの調査協力者の話の中に筋書きを見出すことで、留学の意義や、留学経験と生活設計との関係がそれぞれ異なることに注目することができた。

### 2.3. 調査協力者

本研究の調査協力者は、イギリスの大規模大学の大学院に留学し、出国時に専門職にあり帰国後の復職が決まっているか、明確な専門職キャリア構想をもっていた成人女性4名である。4名のうちAさんは出国時にすでにキャリア中堅であるが、他の3名はキャリア初期あるいはキャリア開始前に留学している。

Aさん：日本での専門職を退職し、イギリスの社会科学系の修士課程を修了した。博士課程を開始後に帰国し、出国前の仕事に復職し、転勤を経験している。大学卒業後同一職を継続していて、家族がある。

Bさん：日本での専門職を退職し、イギリスの社会科学系修士課程に留学して修了した。出国前の仕事に復帰し同業界で転職した。BさんもAさん同様、大学卒業後職種が変わっていない。出発前はキャリア初期であったが、帰国後も同一職を継続し調査時はキャリア中堅であった。

Cさん：日本での業務を退職し家族とともにイギリスへ留学、社会科学系の修士課程を修了後に帰国し出国前と同じ職に復帰した。帰国後の家族との別居生活を解消するため退職、専門職国家試験の受験準備を進めていたが、出産と時期が重なり断念、出産後に自宅で小論文の添削業務にあたっている。

Dさん：出国前に企業で事務職をしながら専門職の勉強を続けるうちに、その専門職でキャリアを築くためには得意分野を確立する必要があることを実感し、イギリスの大学の人文系修士課程に進学した。修了後に帰国し、専門職に就き、後にその専門職を養成する学校の講師も務めることになった。調査時のキャリアは中堅初期にあたると思われる。

## 3. 調査結果

留学経験のある専門職志向の女性を対象とし、留学の成果と生活設計の関係についてインタビューを実施した結果を、留学の成果、成果と効用感のギャップ、成果の認識のされ方、生活設計、成人の留学の5つの項目に分けて解説する。

### 3.1. 留学の成果

留学の成果には共通部分と個人別の部分があり、また成果は過去の経験と現在の経験の照合により認識されていた。

#### 3.1.1. 共通の成果

- 4 調査協力者に共通する留学の成果は、留学中に培われた能力である。全員が修士課程を修了しており、大学院での学習・研究の過程で身に付けた知識・調査力・論理的思考能力・言語能力が留学の成果として挙げられた。また、大学院での勉強とあわせ現地での生活の中で身に付けた異文化感受性や自文化の相対視、人的ネットワーク、複眼的思考力、現実認識の複雑化等が帰国後の生活のなかで機会があれば活用されており、留学の成果として認識されていた。また、これらの能力を身につけたことにより自分が成長したという実感が得られ、それが自信につながっていることが述べられた。

ちょっと大変な…仕事を任されたときに、時間が足りなかったり、ないように見えたり、…できるかなと考えたときに、あとき絶対修士論文を書けないと思ったことをやったんだから、きっとできるとか。…一つの自分の頑張れる度合いみたいなものが自分の中にでき上がったというか。…結局は、それはイギリスで何とか勉強をしていったことが自信になっているということなのかなと思います。自信、励み、基準ともいうのかしら。頑張った時期があったじゃないというような、そんな感じですね。(Dさん)

### 3.1.2. 個人別に異なる成果

上記の成果は調査協力者間に共有されるものであったが、その成果に付される意味や意識される強さはそれぞれの調査協力者によって異なる。また個人固有の成果も報告され、留学に対してそれぞれ異なる意味が見出されていることもわかった。

キャリア中堅で、日本での職務上の研修にあきたらず専門知識の修得を目的として留学したAさんは、大学院の課程で蓄積した知識が現職に役立っていると認識している。また、大学院での研究と並行して大学外の地元のイギリス人との交流も広げるようになった。彼女の話は、他の学生との年齢や経験のギャップ、あるいは日本とイギリスでの生活とのギャップが大きなテーマになっており、ギャップにとまどうとともに、そのギャップが気分転換（ブレイク）やアイデンティティの柔軟化の効果をもっていたという。

自分も〈専門職〉という立場に慣れてしまっていたので…ある程度それに安住していたのが、ただの学生になってしまったということで、すごくそのギャップが。考えてみたら、〈専門職〉と呼ばれて仕事があって、それがないとちょっとさみしいなと思うような年齢で留学しちゃったんですね。

(Aさん)

〈 〉は固有名詞を避けるための筆者による挿入

Bさんはキャリア初期に留学した。もともと留学でなんらかの能力を得て仕事に直接活かすつもり留学したのではないということであった。言語能力と専門知識は現在の仕事で使うことはないが、仕事に係る勉強会で役に立っている。留学中に培った異文化感受性が国内での仕事上でのコミュニケーションで役に立っていることに意義を見出している。

いかに相互理解が難しいかみたいなことってあるじゃないですか。…どこから、本当に、ものすごく基本的なこと確認しながらでないと、伝わらないよねというような経験とかがあるじゃないですか。…それは、行ってなかったらないので、…自分の認識が変わったという意味では影響あると思いますけれど。…どこから喋らないとわたしの言いたいことが伝わらないかというのは、多分今ほどは分からなかったと思うんですよ。自分と同じベースというか、思っていない人と言うんですかね。そういう人に、物を伝える時に、何から話すとうまくポイントが伝わるかとかというのは、留学して、ある程度、コツというか、ポイントが分かったかなという気はするので。(Bさん)

5

キャリア初期に留学したCさんは、帰国後に復職したがその後退職した。現在は専門職についておらず、専門知識がキャリアに活かされていないと感じているが、修士課程で培った調査力や論理的文章力がその後の生活や仕事に役立っており、これらが留学の成果として認識されている。また、インタビューで話をすることが契機となり、普段は思い出すことのない留学時の経験を思い出す、あるいはその経験を省察する機会となり、タフな留学を経て帰国後もひとりで勉強を続けたことが



自信になっていることを確認していた。

月1回とかの例会みたいなのに行ったりとか……。すごい、こんなこと忘れていました（笑）。今思い出した。行ったりとかして、ちょっと〈専門分野〉の勉強とかをずっとしていたんです。…そうやって続けていったりして、だから自分で細々と勉強、研究みたいなことを続けていたんですね、そういえば今思うと。忘れていました。今思い出しました。（Cさん）

〈 〉は固有名詞を避けるための筆者による挿入

キャリア構築の途上にあったDさんの留学の目的は専門知識の修得で、出発前の日本で準備していたスキルに加え留学で学んだ専門知識があることが、現在仕事をするうえで有利に働いていると感じていた。

ほかの人と違って、この人に頼んだら大丈夫かしらと言ってもらえるのは何だろうと考えたときに、その専門分野をつくるというので、きちんとした形で留学するということかしらと思ったんです。なのでその辺から順番に、そのブロックを積み上げていくような形で、これが必要、これが必要というふうにやっていって、留学前にそのあたりのことは描いていたように思います。（Dさん）

### 3.1.3. 成果の認識のされ方

留学の成果は、留学中に培った能力として語られることもあるが、留学時の経験が、帰国後の経験や行動、意識に関連づけられる過程で認識されていることが確認された。また、職業上の場面だけでなく、現在の生活全体と留学経験を関係付けて成果の意味を見出している。

## 3.2. 成果と効用感のギャップ

留学の成果に対する肯定的評価と弱い現職への適用感の間にギャップがある。

### 3.2.1. 留学に対する肯定的評価・成長感と現在のキャリアへの適用に対する不満足感

今回の調査協力者達は、上記の多様な能力の形成、頑張れる自分像の鮮明化、自信、いつでも新しいことを始められる意識、自分が本来もっていた興味の再認識の機会といった形で留学経験とその成果を肯定的に評価しているが、その成果が必ずしも現在のキャリアに直接適用されているわけではない。効用感がなくとも留学への評価はみな肯定的なのだが、このギャップに対して複雑な感想をもっている調査協力者もある。

やっぱり留学していたときのことが、今やっている仕事につながっているのが理想かなというふうには思います。…もう全然忘れていて、テーマ自体は覚えていましたけど、内容とかも忘れていたし、だから自分が書いたということが信じられないというか。だからそれが今につながってないというふうに思うんですけど、逆に。今もその研究でずっと続けてきている人は、絶対にそんなの忘れないうちだろうし、そのときにこういうのをやったのが、今の仕事につながっているというのがあると思うんですけど、それが無いから逆に、そのときの1年間というののもったいないなというふうに思ったりもしますね、今。…特に何が成果があったのかなと言われるとちょっと困るというか、今の自分にプラスというか、今の自分の生活に役に立っているというのはどうかかと。（Cさん）

### 3.2.2. ギャップの成り立ち

留学に対する肯定感とキャリアへの弱い適用感のギャップは、成果観の形成プロセスに起因するものと思われる。成果を認識する全体プロセスは、留学中の努力が論文や学位という形で結果をもたらし、現況と照らし合わせられて成果として認識されるという形をとるようだ。

この中で、留学中に努力した経験は、ある程度の時間の経過の中で内的評価として各自が認識するものである。一方、成果は、学位や行動の結果として目に見えかつ他者による外的評価も含めて認識される。就職や就業は、面接や待遇、収入等、他者評価によって決まる部分が多い。内的評価で決まる留学経験そのものの評価に比べ、内的評価に加え外的評価を伴う仕事の場面では留学の成果を実感するのが難しい可能性がある。

### 3.3. 成果の認識のされ方

留学の成果は常に意識されているわけではなく、また変化するものであった。

#### 3.3.1 機会があれば意識される成果

留学の成果は、普段はあまり意識にのぼっておらず、契機があれば認識の対象になるようである。契機となるのは、仕事を困む環境の変化、仕事や生活上の困難、新しい知識や状況との出会い、他者からのプレッシャー、自分がもともと持っていた興味の再認識等である。普段は仕事や生活に追われ、立ち止まって思い出したり省察する時間や余裕がないことも語られた。

やらざるを得なくなってというか。ちょうど〈制度〉ができる時だったんですよ…今できて動いているからあれなんだけど。「こんなの作るべきだ。」とかいう意見を言うのとかでもあって。それをもろん〈関連団体・上部団体〉とかあるんですけど、やむを得ずというか、流れのままにやらなきゃ仕方なかったみたいな感じで。だから多くなっているというのはそんな感じなんですけれども。(Bさん)

〈 〉は固有名詞を避けるための筆者による挿入

#### 3.3.2. 変化する

上記のように、留学の成果を認識する契機は、仕事や生活上の困難、新しい知識や状況との出会い、他者からのプレッシャー、自分がもともと持っていた興味の再認識といったものであるが、これらは偶然や外的要因にコントロールされがちで、これらの偶発的な外的要因は予測できずに起こるため、成果の認識も変化せざるをえない。

また、成果は過去・現在・未来の時間軸の中で変化する。上述のように、過去の経験と現在の経験の照合により認識されるものであるがゆえに、現在の生活や今後の生活設計の変化に伴いそれらの契機がもたらされ、成果観が変化していく。

そのときそのときでやっぱり、50歳になって振り返った留学とか、60歳になって振り返った留学とか、70歳になって振り返った留学とか、留学の影響というのは継続すると思うんです。…そういう意味で〈留学の成果とはなにか〉結論が出ていないという感じがですね。(Aさん)

〈 〉は筆者による挿入

### 3.4. 生活設計

留学成果の認識に関わる時間軸の中で未来にあたる生活設計について、調査協力者によって語られた内容をまとめる。生活設計における職業面と個人面の不可分性、ライフステージ・ライフスタ

イルと生活設計、キャリアプレッシャーが語られた。

### 3.4.1. 職業生活と私生活

今回の調査協力者4名は、帰国後の職業生活と私的な生活が不可分な形で進行していた。例えばAさんは転勤に伴い家族との分離生活が始まり、私生活の管理と転勤先での新しい業務への適応が同時進行している。またBさんは、帰国後家族との分離生活に疑問をもっている時期に、留学時の専攻を直接活かせる職場への配属が検討されていることを知ったが、結局家族との再結合を選んで離職した。新しい国家資格取得の準備を進めていたが、家族が増えるに従い資格取得を断念し、就業時間を調節できる仕事に就いていた。将来は修士課程で得た専門知識と資格取得準備で得た知識を両方活用できる仕事に就くビジョンを描いている。

### 3.4.2. ライフステージ・ライフスタイルと生活設計

キャリアステージや家族形態の変化によって生活設計（職業面＋個人面）が変化していた。キャリアステージが初期にある人、家族の負担が重くない人は留学中に学業に集中する。ところが、キャリア中堅期にある人は、後述する2段シフト（3.5.2. 留学に伴う市民性と職業上のシフト）に伴い、自分が置かれる社会的立場の、日本とイギリスの間のギャップを、年齢が低くキャリア初期の人たちよりも強く感じる一方、そのギャップがあるために日本での職業中心の生活からの気晴らし効果も大きく感じたようだ。

家族形態も生活設計の形成や変化を導いていた。家族形成期には結婚・出産・育児といったかなりエネルギーを要する出来事が続き、これらの家族形成に影響を与えない程度のキャリア行動がとられていた。一方、家族形成期を過ぎ、家族維持期に入っている調査協力者は、職業上のキャリアと私生活のバランスが図られている。

ライフステージのいつの段階でも、なんらかの都合で別居している場合は、相互訪問あるいは再結合という形で、家族と過ごす時間の確保が図られ、職業と私生活のバランスに対応している。

### 3.4.3. キャリアプレッシャー

今回の調査協力者の女性たちは、職業上・私生活上のステージはそれぞれ異なるが、生涯キャリアをもつことが当たり前だとの前提をもっていることは共通のようだ。それは時に自分の思いいれや他者の発言によるプレッシャーという形で現れていた。

わたしは仕事を自分が辞めるということは、それまでの生きていた中であまり考えてなくて、結婚してもやっぱり仕事はずっと続けるというのが当たり前みたいに思っていたので、辞めるに当たって、夫にも「じゃあ辞めた後これからどうするんだ」というふうな感じで言われて、わたしも専業主婦をするなんていうふうには考えてなかったので、やっぱり次に何かしようというのがあったんですね。（Cさん）

## 3.5. 成人の留学

- 8 10代後半から20代半ばまでの伝統的年齢で就職経験のない学生と比較すると、社会人経験のある成人の留学には、資金の負担感、ダブルシフト効果、そして生活設計省察の機会としての留学という3つの点に特徴があることがわかった。

### 3.5.1. 金銭的負担感と自己投資意識

留学にかかった費用については負担感をもっているが、それを自分への投資として捉え、留学とその成果について全員が肯定的に評価している。



この点は、みんな同じだと思うんですけど、貯金をはたいて行ったので、留学中も、帰ってきてからも、金銭的にはしばらく苦しかったですね。それは一つ。でも、全然ネガティブだと思っていません。非常に大きな投資をしたというか、そういうためにお金はあったのだと思ったり。客観的にネガティブではないです。(Dさん)

お金。…いやいや、失ったじゃないですね。これは費やしたですね。失礼しました。失ったではない。(Aさん)

### 3.5.2. ダブルシフト効果

年齢・性別等を問わず、一般的に留学生は文化の違いに起因する適応の課題に直面する。出身国民あるいは出身民族の中で暮らす生活から、留学先国民や他の民族集団の中で暮らす生活へ移行し、出身文化や慣れ親しんだ制度と留学先の文化や制度との違いに出会う。この文化シフトに伴い、はじめは相手に自分の感情や考えを理解させ自分の期待する結果を得ることができないこともあり、とまどいやフラストレーションを経験するが、やがて新しい環境の中で他者が自分を理解できるようなスキルを身につけ、自分の求める結果を得られるよう行動し快適に過ごせるようになるのが適応のプロセスである。

調査協力者の話からは、留学生一般が経験する文化的適応のみならず、市民的側面と職業的側面の2点での移行を経験していることがわかった。

市民的側面のシフトとは、日本での多数派からイギリスでの少数派への移行である。日本で日本人成人であることは、一定の責任を果たすのと同時に権利を行使しイニシアティブを発揮できる社会的多数派として生活することを意味するが、イギリスに留学すると外国人という少数派、それも日本人成人はかなり人数の少ない少数派に属することになり、社会的自立度やイニシアティブ行使の程度が低くなる。留学生一般にみられる文化の質的な違いによる適応に加え、成人留学生には人数の量的な小ささと、日英両国での自分の社会的存在感の違いが課題として加わってくる。

また、職業的側面も、社会人から学生という移行は伝統的年齢の学生にはないもので、社会的ステータスの剥奪感やギャップへのとまどい、就業を前提とした日常性からの距離感に結びついていた。職業的シフトは、日本での職業中心の単一に近いアイデンティティのありかたから、学生や前述の社会的少数者を含んだものへとアイデンティティの複雑化を導いていた。また、アイデンティティの複雑化は職業アイデンティティを相対化する作用があるようで、気分転換ができ、気力や創造性の再生につながり、日本での仕事に満たされた日常性からのブレイクの効果があるようだ。

若いときはフレッシュな気分で何でもいるので、環境が変わっても自分に対する変化がないというか。年齢がいったから留学すると変化があるので、そこで自分にもつらさが出てくるんだけど、つらくても違ったことを経験することによって得る部分も、自分と違うなということを経験することがいいことだったりするんだと思います。若いときは違いを認識できないかもしれないし、そしてまた、違った環境で生き延びていく力というのを培うことができる。それは弱ってくると思うんですけど、年を経るに従って。(Aさん)

9

### 3.5.3. 生活設計省察の機会としての留学

伝統的學生には職業経験がないことが多いのに比べ、成人留学生は就業経験があり、就職活動や就業が未知のものではない。前述の職業上のキャリアを一生もつべきといった意識や、生涯1職種(単線型)や状況により複数の職業や社会的役割を同時進行(複線型)等の一定のキャリア観を各自

がもっていると考えられる。

職業経験や職業観、今後の希望等をもった個人が留学を経験し、留学は能力の育成の場であるの同時に、生活設計の見直しの機会としても捉えられていた。

MAをやったらすぐ帰ろうと思っていたんですね。もう自分は1年で、それでちょっと今の英語力なり、教授法の知識なりをアップさせて、帰ってまた〈専門職〉を続ければいいやと思っていたんですけど、このまま研究のこととか勉強を続けていくという道もあるんだなとそこで思ってたんですけど、そのままそれを続けることができなくて、また…戻ってしまったんですね。それでもいいんですけども、また定年になってからでも、その前からでも、そのほうを主にやることもできるかなということで、そう考えることがキャリアを考えることが自分を元気にしているわけではないんですけどね。(Aさん) 〈 〉は固有名詞を避けるための筆者による挿入

#### 4. 考察

この項では、今回の調査の結果を先行研究と照らし合わせながら留学の成果と生活設計の関係を分析し、今後の留学生支援への示唆を検討していく。今回の調査結果をまとめて表にすると下記のようなになる。

表 1. 調査結果

1. 留学の成果	共通：能力（知識、調査力、思考力：論理・複眼、言語能力、異文化感受性、自文化の相対視、人的ネットワーク）と成長の実感・自信
	個別：ギャップの困惑とリフレッシュ効果、地域の知識、自信、調査力、論理性、専門分野確立による転職
2. 留学経験と留学成果への評価の不一致	留学経験への肯定的評価と成果の非効用感
3. 成果の認識のされ方	普段意識されず機会があれば認識、偶然のできごとや外的要因が契機で成果の認識は変化する
4. 生活設計	不可分な職業面と個人面、ライフステージ・生活形態の影響、キャリアアプレッシャー、ビジョン先行以外もあり
5. 成人の留学	資金の負担感、ダブルシフト、省察の機会

前述のように、先行研究では、下記のようなことがわかっていた。

- a 仕事に活かされる能力としての留学の成果
- b 複数のフェイズで構成されるキャリア形成
- c 職業と個人の2つの側面の不可分さ
- d 女性の生活設計（職業面＋個人面）の困難さ
- e 成果・生活設計の変化の継続性

##### 4.1. 先行研究との比較

まず、今回の調査と先行研究との相似点と相違点を確認する。

a 仕事に活かされる能力としての留学の成果

留学の成果が仕事に活かされる能力として実感されることについては、今回の調査でも同様であった。しかしながら同時に、職業に直接活用されていなくても、あるいは活用できる職業に就いていなくても、調査協力者たちは能力を留学の成果として認識し、留学経験を肯定的に評価していた。留学によって培われた個別の能力は職業上直接的に使えなくとも成果として認識され、成長感やタフな留学を完遂した達成感と自信とあわせ、個人的側面を含めた生活全般で実感されている。また、留学経験に対して個人別にそれぞれ異なるテーマが見出され、留学の成果に個人差があることは無視できない。

b 複数のフェイズで構成されるキャリア形成

キャリアプランには複数のフェイズ（ビジョン形成 → 目標設定 → 能力育成 → 就職活動（他者評価） → 能力活用 → 職場（他者評価） → 現実解釈 → ビジョン形成）があることも先行研究と一致する。特にDさんは、留学後に転職する予定であった専門職に就くことがキャリアビジョンで、専門職の確立に必要な専門知識を得るという明確な目標のもと、留学中に専門知識を蓄積して帰国し、専門知識を武器に専門職を確立するといった、典型的なビジョン先行のキャリア形成プロセスをみせていた。しかしながら、AさんやBさんのように、専門知識の修得を求めて留学し、それが現在の生活で役に立つケースばかりではなく、専門知識を直接仕事に活かすことを留学の目標としていたわけではない調査協力者もいた。また、もともと家族の渡英に合わせる手段として留学したCさんの場合、結果として能力や達成感を得ているが、それはキャリアビジョンや達成目標として設定されたものではなかった。また、同一キャリア継続型のBさんも職業上の特定の目標を達成するために留学したわけではない。先行研究でも見出されたように、ビジョン・目標先行のキャリア形成ばかりではなく、能力向上と平行して、あるいは能力育成の後にキャリアビジョンや目標がってくるパターンもある。また、職業上のビジョンとは関係のない留学もあり、キャリア向上という利益追求以外のパターンもある。

c 職業と個人の2つの側面の不可分さ

これは職業と個人の2つの側面の不可分さにも関係してくる。先行研究と同様に、今回も家族のある調査協力者は家族との同居や結婚・出産による家族形態の変化に対応できるよう、仕事の内容、仕事の仕方、時間の管理を工夫していた。つまり、人が生活の見通しを考えたり計画を立てるとき、職業上の進展だけを取り出して考えるのではなく、個人生活の面と職業面の両者のバランスを考えながら行なうことがあることを示している。したがって、人生の計画をキャリアプランと呼び、個人生活をそれに付随するものとして扱うのではなく、職業面と個人面の両方を含む「生活設計」と呼び、その上で個人によって異なるであろう両面の比重を考慮すると、実際の姿に近いのではないだろうか。

d 女性の生活設計（職業面+個人面）の困難さ

西村のいう、家事・育児の女性への負担を示すM字カーブによる生活設計（職業面+個人面）の困難さは、Cさんが経験していた。出産のため国家試験受験をあきらめ、育児のために自宅のできる仕事をしているが、もともともっている一生仕事を持つものだという意識との齟齬にストレスを感じていた。

e 成果・生活設計の変化の継続性

留学の成果観や生活設計の変化の継続性も先行研究と同様に今回の調査でも認められた。

まとめ

先行研究と同様の結果も多かったが、今回の研究で新たに確認されたこともある。職業面だけで

はなく生活面でも成果を認識すること、留学の成果にかなり個人差があること、キャリア先行でない留学もあり、キャリアプランというよりも個人生活の面とともに生活全体を設計をしていること、女性にはキャリアプレッシャーと家族維持の責任という2重のストレスがあることがわかった。

#### 4.2. 留学生支援への示唆

一定数の成人が留学生として海外の大学・大学院に進学する状況下では、日本の大学・大学院が留学生を受け入れるにあたり、成人の特性を充分考慮した上で留学生教育や留学生支援を考える必要があるということになる。以下に人口動態の多様性、経験、女性をキーポイントとして対応策を提案する。

まず、成人は年齢・学歴・職歴など人口動態的な個人差が大きく、一定数が存在するとしても学生の中では少数者である。この人口動態的多様性への対応は、基本的にマイノリティへの対応としてとらえることが肝要だろう。マジョリティである伝統的年齢の学生向けに作られている施設をマイノリティ支援の形で再整備する、例えば家族とともに入れる学生寮の増設や、キャンパスに拡散している成人学生が集うことができる居場所の確保などが課題になるだろう。

また、彼らがつ職業上や個人的生活での経験は様々な形をとって留学生活に影響を与える。経験に基づき、留学目的や留学先の大学・大学院への期待も多様である。この多様なニーズを迅速にカリキュラムや生活サポートに制度として反映できる体制があることが、留学予定者にとって魅力のひとつとなるだろう。

成人の経験についてはふたつの側面を想定する必要がある。ひとつめは、成人はものごとを解釈する枠組みが既にできあがっていて、新しい経験やダブル・シフトしたときに対応に時間がかかるということである。ふたつめは、豊富な経験が他者に肯定的な機会を提供する資源になる可能性である。したがって、彼らの職業上や個人生活での経験をキャンパス規模で共有する場を設ければ、生活設計の際の参考事例に触れたり、成人学生同士の帰国後も続く人的ネットワーク形成の機能も期待できる。また若い学生への講演会の実施やメンターとして活躍してもらうこともできるだろう。また、居場所の確保とあわせ、人的ネットワークの存在は、留学生活で直面するダブルシフトの経験を他者と共有することで心理的負担を軽減する、あるいはアイデンティティや生活設計の省察の機会を提供することにもなるだろう。

女性の留学生については、キャリアプレッシャーとともに、ライフステージ・生活形態の影響が男性よりも強い人もあることを想定し、学業に専念できる環境整備が必要になるだろう。前述の家族寮に加え、学内あるいは近隣との連繋による保育施設の整備、行政サービスとの橋渡し専門部門の設置等の対応が考えられる。

また、日本の発達した公共交通機関や、犯罪の少なさ、基本的な医療サービスは生活の安全性という点で、女性の、特に子どもを帯同する留学生に訴求力がある可能性がある。また、食の多様性、「カワイイ」服飾など衣食に関わる部分も海外からみた日本の魅力のひとつだろう。他国の教育機関と学術的な魅力が同等で留学先選択に迷っているとき、日本社会のソフト面が女性が日本を留学先として選択することを後押しするかもしれない。

上述したことを制度として整備した上で、海外に向かって戦略的に宣伝し、「あの大学へ行けば自分の生活設計を練り上げる機会がある」という他国からの成人留学生にとって魅力的な大学としてのイメージを作れば、エンプロイアビリティの強化を含めた「自分への投資」として授業料を払う気持ちを起こさせる大学になるだろう。

【文献リスト】

- 赤崎美砂 (2009) 「成人の留学成果：留学から就職まで」『国際経営・文化研究』13 (2) 1-14
- 赤崎美砂 (2010) 「多様な留学成果：成人の留学とキャリア形成」『国際経営・文化研究』14 (2) 23-36
- 赤崎美砂 (2012) 「留学が実現する条件—大学生の海外志向」異文化コミュニケーション学会 2012 年度年次大会抄録 p14
- 加賀博 (2000) 『21世紀の勝ち組人材となるためのエンプロイアビリティ—自己市場価値開発』恒友出版
- 加藤恵津子 (2014) 「グローバル人材か、グローバル市民か—多様な若者の、多様な海外渡航のススメ」『留学交流 Vol.34, 1-11
- 金子元久 (2000) 「周辺の大学とその未来—高等教育のグローバル化」『教育社会学』(66) 41-56
- 小柳志津 (2002) 「留学大衆化のなかの在豪日本人留学生：留学動機と成果を中心に」『留学生教育』(7) 27-38
- 武石恵美子 (2006) 『雇用システムと女性のキャリア』勁草書房
- 田中梓 (2010) 「若者は本当に内向きになったのか？—日本人の英国留学とブリティッシュ・カウンシルの留学促進に向けた取り組みについて」『留学交流』22 (7) 14-19
- 西尾亜希子 (1999) 『日本人留学生の留学動機に関するジェンダー学的考察』日本ジェンダー研究 (22) 57-71.
- 内藤均 (2007) 「これからの留学生就職支援のあり方」『留学交流』日本学生支援機構 19 (2) . 14-17.
- 日本学生支援機構 (2005) 『平成16年度「海外留学経験者の追跡調査」報告書—海外留学に関するアンケート』独立行政法人日本学生支援機構留学情報センター
- 箕浦康子編 (1999) 『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門』ミネルヴァ書房
- 箕浦康子編 (2009) 『フィールドワークの技法と実際Ⅱ—実践・解釈編』ミネルヴァ書房
- 村松幹子 (2000) 「女子学生のライフコース展望とその変動」『社会教育学研究』(66) 137-155
- 文部科学省高等教育局学生支援課留学生交流室 (2008) 『「留学生30万人計画」骨子の策定について』文部科学省 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/07/08080109.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm) アクセス日：2009/01/05
- 文部科学省 (2013) 『日本人の海外留学状況』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/02/\\_icsFiles/afieldfile/2013/02/08/1330698\\_01.pdf#search...](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/_icsFiles/afieldfile/2013/02/08/1330698_01.pdf#search...) アクセス日：2014/01/13
- Institute of International Education “Open Doors 2011 ‘Fast Facts’”  
URL : [www.iie.org/.../Open-Doors/Fast-Facts/Fast%20Fact...](http://www.iie.org/.../Open-Doors/Fast-Facts/Fast%20Fact...) アクセス日：2012/11
- Mukherjee Mousumi (2012) US Study Abroad from the Periphery to the Center of the Global Curriculum in the Information Age. Policy Futures in Education, 10 (1) 81-89
- OECD (2012) “OECD Education at a Glance”  
URL : [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/002/index01.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/index01.htm) アクセス日：2012/11

<sup>1</sup> 加賀 (2000) によると、エンプロイアビリティは雇用されうる能力、自己市場価値という意味をもつ。

<sup>2</sup> 日本で開催される外国人学生のための就職活動フェアに出席する学生の40%超が職務経験者だという数字がある。



(内藤, 2007)

- <sup>3</sup> アメリカの送り出し留学生の総学生数に占める割合は送り出し0.3%、受け入れ12.0%である。(OECD, 2012)
- <sup>4</sup> 2009年度のアメリカの送り出し留学者数に占める行き先地域の割合はヨーロッパが53.5%、南アメリカは15.0%、アジアは12.0%である。留学期間(2010年度)については、短期間(夏休みまたは8週間以内)が56.6%、中期間(1学期以内)が39.4%、長期間(1年)が3.9%である。(Institute of International Education, 2011)
- <sup>5</sup> 日本人の海外留学者数の推移は、1990年が2.7万人、2000年が7.6万人、2010年は5.8万人である。ピークは2004年で8.3万人であった。(文部科学省, 2013)

(受理 平成26年1月17日)